

# 万行寺報

Mangyoji Jihō

発行 浄土真宗本願寺派 万行寺  
住職 山崎信充  
〒385-0003  
長野県佐久市下平尾4 6 1 - 1  
電話 0267-67-2460

2023(令和5)年

仏暦2566年

8月号

(第143号)

実践運動 総合テーマ『そとつながる ホッがつたわる～結ぶ絆から、広がるご縁へ～』



## 法住話職

### 弥陀の光は生きる慶びの源

正信念仏偈に学ぶ  
超日月光照塵刹  
一切群生蒙光照  
超日月光を放ちて塵刹を照らす。一切の群生、光照を蒙る。

「現代語訳」  
超日月光とたたえられる  
光明を放って、広くすべての国々を照らし、すべての衆生はその光明に照らされる。

光明月日に勝過して  
超日月光となづけたり

釈迦嘆じてなほつきず  
無等等を帰命せよ

(阿弥陀仏の光はその輝きが太陽や月の光に超えすぐれているから、超日月光と申しあげる。釈尊がどれほどおほめになっても、たとえ尽すことはできない。くらべようのないすぐれた仏である無等等に帰命するがよい。) 引き続きいて和讃から、十二光の最後の超日月光について

て詠まれた和讃になります。私たちの身近にある光という、まず思い浮かべるのが太陽や月の光です。太陽の光は暗いところを照らしたり、生物にとつては生きるために欠かせないものです。しかし、阿弥陀さまの光明は、太陽の力をはるかに超えた光だといわれるのです。つまり、十二光のまとめとして、阿弥陀さまの十二の光明は、何ものにも喩えることができないほど素晴らしいものだということです。「塵刹」とは、塵の数に喩えて、それほど多くの国のすべてを照らしてくださいという事です。「蒙光照」の「蒙」は「蒙る」と訳され、「被る」ということです。光明に照らされ護られているという意味です。

これまで十二光をあげてきました。十二の光がそれぞれ、阿弥陀さまの光明は十二の光を照らし続けてくださるもの。さらには護ってくださいるのです。話とはびますが、八月は戦争の事に触れずにはいられませんが、今年の長崎原爆の日、長崎市長の宣言の内容が印象的でした。被爆者で六年前に亡くなられた谷口稜暉さんの遺された言葉です。「過去の苦しみなど忘れ去られつつあるようにみえます。私はその忘却を恐れます。忘却が新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れます。」忘却という言葉を忘れて忘れ去られていくことを恐れると言われます。人間にはどうしても忘れていくという姿があるからこそ、常にあらためて過ちに気づく姿勢が大切なのでしょう。ですから、語り継ぎ気づくことが重要です。私たちは仏さまを忘れても、仏さまは常に光明で照らし護ってくださいます。忘れることなどありません。その光に気づき出会うことが、生きる慶びの源にもなるのです。

# 浄土真宗 新 仏事のイロハ

## 四、法要・行事

— 仏縁を深めよう —

### 「法事の意味」

### 法事はいつお勤めする？

法事は、仏事とも言います。意味するところは、縁ある人びとが集まって、ともに仏さまを敬い、その教えを聞き、僧侶を迎えて、仏道を実践していく行事のことです。浄土真宗で言えば、阿弥陀仏を敬い讃えて、その本願のはたらきであるお念仏のいわれを聞き、お念仏の人生を歩むことを確認し合う集い、と言えましようか。

実際に、私たちが行う法事

年忌表

年忌法要	死亡からの年数
1 周忌	1 年後
3 回忌	2 年後
7 回忌	6 年後
13 回忌	12 年後
17 回忌	16 年後
23 回忌	22 年後
25 回忌	24 年後
27 回忌	26 年後
33 回忌	32 年後
50 回忌	49 年後

※以後、50年ごとに勤める。

と言え、亡き人の命日をご縁に努める年忌法要（年回法要）でしよう。もちろん、葬儀も満中陰も仏法の集いです。すから法事です。

ともあれ、年忌法要について、いつ勤めるかをご説明いたしましょう。

まず、亡くなって一年後に勤める法事が一周忌です。二年後は三回忌と言います。次回忌です。以後、十三回忌、十七回忌……と、上の表のようになりまます。なお、二十五回忌を二十三回忌と二十七回忌に別けて勤める地方もあります。三回忌以降は、「A 回忌 II 亡くなつて（A—）年後」と覚えておけばよいでしょう。

ところで、この法事、亡き人をご縁に勤めることから、「亡き人のために」行うもの

と思われがちです。いわゆる追善供養です。すなわち、亡き人のために私たちが法事を行って善を積み、その功績を亡き人に振り向けて、少しでも良い世界に生まれてもらおう

うという考え方です。

しかし、浄土真宗の味わいでは、亡き人は阿弥陀仏の救いによつてすでに浄土に生まれ、仏さまになつておられます。ということ、こちらから善を振り向ける必要はないのです。法事はあくまで、参拝者一人ひとりの「私のために」催される仏教行事なのです。仏さまとなられた亡き人を偲ぶ時、亡き人は私たちに「いつでもどこでも、どんなことがあつても、けつして見放されぬ阿弥陀さまを依りどころにして、たくましく人生を歩んでくれ。そして、私のいる浄土に生まれて、再び会おうよ」と願われていることでしょう。その願いを聞くのが年忌法要の大切な点です。

「浄土真宗 新 仏事のイロハ」末本弘然著／本願寺出版社刊より



### 年忌法要表

1 周忌	2022 (令和 4) 年	23 回忌	2001 (平成 13) 年
3 回忌	2021 (令和 3) 年	25 回忌	1999 (平成 11) 年
7 回忌	2017 (平成 29) 年	27 回忌	1997 (平成 9) 年
13 回忌	2011 (平成 23) 年	33 回忌	1991 (平成 3) 年
17 回忌	2007 (平成 19) 年	50 回忌	1974 (昭和 49) 年

### 編集後記

八月号の寺報は、過去も何かしら戦争の事に触れ続けてきました。「住職法話」は取って付けたようでわかりづらいつころはお許しください。◆しかし、世界で戦いが続く中、非戦を訴え続けたい者が、使命を全うしたいという思いがあります。それは、恐れることだらけの現代社会だからかもしれません。